

INAF 第 21 回研究会

INAF 日韓フォーラム「新しい時代の日韓関係のあり方と展望」 問題提起

三村光弘（新潟県立大学北東アジア研究所 ERINA-UNP）

はじめに

- 「新しい時代」とは何か
 - 尹錫悦政権期
 - 世界の「多極化」が進行し、北東アジアにも日韓（米）と中朝の 2 台陣営が形成され、ブロック化が進行する時期
- 1. 尹錫悦政権における日韓関係の変化
 - 慰安婦問題、徴用工問題に対する裁判所の判断と行政府の行動の乖離
 - 北東アジアにおける多極化とブロック化の進行に対する対応としての日本（および米国）との協力関係の強化
 - 日韓（米）関係を重視する行政府の態度→重視することはほぼ自明であり、なぜ重視すべきかを丁寧に説明しているとは言えない
 - 首脳間の意思疎通の緊密化と歴史的に日韓関係を支えてきたルートの復活（外務省—外交部）→文在寅政権期の「日本軽視」から一転して変化
- 2. 民主化以降の各政権期を貫通して変わっていないこと
 - 韓国政府の立場は、日韓合邦は日本の朝鮮半島の植民地化であり、違法で（起点から）無効。歴史問題において日本は責任のある態度を取るべき
 - 韓国国民の認識も同様。現在の日韓関係は政治面が良好になったが、歴史問題に対する態度を積極的に明確にしようとしない日本に対する不満は鬱積
- 3. 日本の取るべき対応
 - 歴史問題に対して、河野談話（1993 年 8 月）、村山談話（1995 年 8 月）、小泉談話（2005 年 8 月）についてどのような態度を取るのかを明らかにする必要がある。もし慰安婦問題が韓国側の誇張によるものだというのなら、それを明確にして、韓国との外交戦を戦うべきであろう。
 - 歴史問題に対する取り組みは、日韓関係だけに留まらず、対中関係や今後ありうべき日朝国交正常化にも大きく影響する。したがって、日本の周辺国との関係の未来を規定する問題として、慎重かつ戦略的に取り扱う必要

がある。

- 他方、北東アジアにブロック化が進行する現状を鑑みれば、地域大国である中国、ロシアに対し、ミドルパワーの日本と韓国が協力しつつ、地域の未来を作る提案をする必要がある。
- 歴史問題の解決には時間がかかるが、それとは別に現在から未来への問題で協力するという合意を作る必要がある。

4. 日韓関係の展望

- 日韓関係は経済界の関係は深く、「離れることのできない」相互依存関係にあるが、政治面での関係は波動がある。
- 日韓が共通の利益を前面に出して協力できるかどうかは、日韓双方における世界秩序の変化に対する認識が揃う必要がある。現状では韓国の方が変化に敏感であり、日本は鈍感である。これが日本の対応が韓国の望むほどには速くない理由の一つであろう。
- 世界秩序の変化速度は速く、日本が韓国の期待に追いつけない場合には、協力すれば大きな変化を生み出せる潜在的可能性を葬ることになり、これは日韓双方を傷つけ、両国の利益を害する。それに日本の政治家、専門家、市民が気づけるかどうか、両国の繁栄が得られるかどうかの分かれ目。

おわりに

- 世界秩序の変化のなかで、日韓が協力すれば、大国である中口に北東アジアの安定という役割を要求し、この地域の未来を大きく変え、両国だけでなく地域全体の利益となる安定した秩序を作ることに貢献できる。
- 歴史問題は日韓両国の民族主義と結びついているので、合意は難しいが、未来に対する協力を放棄して、得られる繁栄を失うという選択をするのはあまりにももったいない。
- どうすれば日韓両国が未来志向の協力関係を維持していける環境を作ることができるのか。次世代の参加の下で新たな関係作りを模索する必要がある。

以上